



▲一里道標 (伊予見峠)



▲二里道標 (砂川公民館)



▲三里道標 (山本支所)

こんぴら道標 どうひょう ～参詣のための道～

江戸時代、金比羅宮は金比羅大権現と呼ばれ、今と同じく多くの方が参詣さんけいに訪れていました。金比羅宮のお参りのために、人々が往来した道を金比羅街道といいます。そのうち、川之江から豊浜、大野原、山本を經由して金比羅宮へ至る道を伊予街道と呼び、現在の国道377号線とほぼ重なります。その道沿いに、一里(約3.927km)ごとに建てられた道標がこんぴら道標です。道標の表面には、『こんぴら大門より〇里』(〇は数字)と刻まれており、山本町では一里から三里までの三基が確認されています。これらは昭和45年11月に、市指定有形民俗文化財になりました。

当時は金比羅宮まで徒歩で参詣していたため、穏やかな旅路ではありませんでした。伊予街道は、道幅は狭く、曲がりくねった道で難所も多かったといわれており、沿道には参詣者の疲れを癒す茶店や宿屋がありました。

一里道標は伊予見峠に、二里道標は神田砂川に、三里道標は河内川橋西側に建てられていました。一里道標には、弘化四年(1847年)と刻まれており、どの道標も大きさや字体が共通していることから同時代に作られたものと考えられます。道標に刻まれている寄進者は、すべて伊予の人たちであることから、この道標が県内外の多くの人に利用されていたことがわかります。現在、道標は道路工事などで本来の位置から移動され、一里道標は伊予見峠にあり、平成5年に建て替えられました。二里道標は砂川公民館に、三里道標は山本支所に移設されています。この道標以外にも、山本町内には灯籠や、方角や行き先を記した道標が残っています。

かつての旅路の案内役だった道標は、その役目を終え、今は人々の往来を静かに見守っています。

<生涯学習課>

今月の市民力

三豊の地に根を下ろし、地域と農業にしっかりと目を向け、生活する5人の新規就農者。生産するものは違っても「消費者の皆さんに美味しいものを届けたい」という思いは同じ。野菜や豚に本気で向き合い、独自の生産方法を模索しながら一歩ずつ足を進める5人は、三豊の農業をよくしたいという思いや若き仲間を増やしたいという思いで日々がんばっています。消費者の「おいしいよ」の声が生産の励みとなり、野菜などのおいしさにつながる循環が見えてきました。コツコツと生産に取り組み、すがすがしい笑顔で今日もがんばっています。

